神奈川県現代俳句協会会報

第162号

令和５年12月発行

第40回俳句大会報告

村上　裕也　記

令和五年十一月二十四日
於・かながわ県民センターホール

まさに小春日和のもと、九十七名の会員が参加されました。席題「冬温し」と「マイク」が発表されると、参加者の皆さんは真剣に句作りに取り組まれました。

大会はなつはづき氏の司会で始まり、開会の言葉を副会長の大本尚氏、その後の挨拶には大会実行委員長の佐藤久氏、会長の尾崎竹詩氏が続きました。

ご来賓の千葉県現俳協副幹事長の石井紀美子氏、東京都区現俳協総務部長の長谷川はるか氏、東京多摩地区現俳協副会長の根岸敏三氏、横浜俳話会会長の川島由美子氏、神奈川県俳句連盟会長の清水呑舟氏からご挨拶があり、最後に、現俳協副会長の高野ムツオ氏から講師のご紹介をいただきました。講演は小熊座俳句会同人で童話作家でもある俳人の武良竜彦先生。『石牟礼道子の俳句について』（副題・畏怖する魂の渚）と題するお話をいただき、俳句の奥深さを改めて学ばせていただくことが出来ました。

会場風景

休憩を挟んで当日一句会が開催されました。披講は田中悦子氏、河原珠美氏、山下遊児氏が担当されました。集計時間中に芳賀事務局長より新会員の紹介がありました。

その後、募集句の講評を栗林浩参与、鹿又英一参与、尾崎会長からいただき、当日句の講評はご来賓の先生方からいただきました。大会募集句入賞者の表彰を尾崎会長が行い、当日句会入賞者の表彰を佐藤実行委員長が行いました。

最後に副会長の田畑ヒロ子氏が閉会の言葉を述べ、大会は無事終了しました。

その後、懇親会場へと移り、長谷川昭放氏、杉美春氏のお二人の軽妙な司会で参加された皆様は楽しい時間を過ごされて、懇親会も無事終了しました。

懇親会

（撮影：宮永武彦
藤田裕哉）

入賞作品　（事前投句の部）

神奈川県現代俳句協会賞
水買いに出て立秋とすれ違う　関戸　信治

神奈川県知事賞
鶴飛来空はすみずみまで多感　かわにし雄策

神奈川県議会議長賞
夕焼のどこに立ちてもどまんなか　栗林さと子

神奈川県教育委員会教育長賞
天国に空席押さえ蜆汁　菅原　若水

ｔｖｋ賞
青簾いつも一人で見る写真　岡田　恵子

横浜俳話会賞
ふつくらと日本のにほひ小豆煮る　小川　竜胆

トピックス

第40回
俳句大会報告
諸家近詠
サミット短信
俳人交遊録
結社便り
会員新刊案内
新しい風
丹沢句会
吟行会報告
冬の一句

神奈川県俳句連盟賞

冬瓜の鈍感力の重さかな　北村　文江

入賞

背の順が変わり二学期始まりぬ　麻生　明
着ぶくれて一番奥にある命　田畑　剛
冬瓜を抱いて明日から世帯主　※かわにし雄策
新緑や未来を連れて乳母車　大澤　秀子
敗戦忌叩いて回すジャムの瓶　徳吉洋二郎
草取りの大きな尻に突きあたる　※麻生　明
この国に生れて背負ふ沖縄忌　中岡　昌太
ポケットが重たいすぐに冬が来る　※関戸　信治
島の子の声まで日焼け登校日　※大澤　秀子
亡き児にも齢のありし赤のまま　藤方さくら
初日の出太平洋を脱ぐところ　北村　峰月
よき彩に村が膨らむ稲穂かな　岡田　春人
バス停に子を降ろし去る稲刈機　※田畑　剛
墓洗うあなたの分も生きてます　田畑ヒロ子
風船の糸持ちしまま眠りけり　尾澤　慧璃
衣紋掛六月の鬱吊しおく　芳賀　陽子
盗人萩笑顔の人に付いてゆく　岡田　翠風
節くれの手が語り合ふ日向ぼこ　杉山由紀子
石鹸の角美しく初湯かな　沼宮内　薫
ファスナーが噛んで蝶蝶になれないの　※関戸　信治
瓢箪の中は遥かな海である　伊藤　梢
冬の蝶　焚書のにおいしていたり　田尻　睦子
かき氷同じこと考へてゐる　塚田佳都子
赤とんぼ風ひと握り持ち帰る　なつはづき
夕焼けになったキリンとバイオリン　大西　惠
大いなる無口琵琶湖に雪しんしん　※かわにし雄策
羽根なしの扇風機からくる平和　竹村　半掃
ふるさとに知る人途絶え祭笛　川村智香子
Tシャツからぬっと出てくる相模湾　※川村智香子
石ひとつ動かしてより秋に入る　中山　妙子
にんげんの細胞にある冬銀河　山本　敏倖

当日一句句会　報告　**尾澤　慧璃**

来賓作品

手になじむ遺愛のお猪口冬温し　石井紀美子
シャウトするマイク山茶花を散らす　長谷川はるか
マイクなりテスト済にて演台に　根岸　敏三
冬温しマイクは呼び出すためのもの　川島由美子
冬温し笑み戻りたる反抗期　清水　呑舟
手の熱はマイクのみ知り初時雨　高野ムツオ
冬温しナイルも我も氾濫期　武良　竜彦

入賞作品

神奈川県現代俳句協会賞

冬ぬくしゆらゆら猫になってゆく　伊藤　梢

横浜市長賞

冬温し背中を掻いてくれる人　國分　三徳

横浜市議会議長賞

切株に残る杉の香冬ぬくし　関根　洋子

横浜市教育委員会賞

冬ぬくし知らず知らずの一万歩　八木　和子

ｔｖｋ賞

凡庸な目玉焼です冬温し　関戸　信治

一人一句

百歳の忠犬ハチ公冬ぬくし　横川はっこう
どの角を抜けても水路冬温し　中山　妙子
カラオケのマイク取り合ふ神の留守　鹿又　英一
冬温し護符はる島の駐在所　青木　敏行
弁当の仕切りに季節冬ぬくし　里見　美季
じゃんけんで行き先決めて冬ぬくし　金栗トモ子
縄文の土器の破片や冬ぬくし　荻野　樹美
冬ぬくし大樹は逆鱗こぼしつつ　田尻　睦子
縄跳びの内側にある冬温し　竹村　半掃
イヤリング揺らしマイクの人の咳　岡田　翠風
白息と風の混線するマイク　杉　美春
冬温しマイクテストの指の音　尾澤　慧璃
負け将棋すねた子どもに冬温し　式部　洋子
冬ぬくし高齢化という無重力　尾崎　竹詩
冬温し三つ目玉のハムエッグ　若林　和美
冬温しひらめきひとつ追いかけて　加賀田せん翠
冬温し会はねば忘れられてゆく　薄　よし子
冬温しトリケラトプスの帰心かな　河原　珠美
駅前に凧一号マイク鳴る　高橋みどり
陽だまりは母のポケット冬温し　北村　文江
きりたんぽをマイクに演歌唄ひ出す　山下　遊児
凧やさらば昴よピンマイク　岡田　典代
熱弁のマイクの湿り冬温し　長谷川昭放
縁側の祖父の丸みや冬温し　芹澤しょう子
冬温しいつか私もブーケトス　かわにし雄策
てにをはと組んず解れつ冬温し　根岸　順子
また会おう言の葉残し冬温し　星　由江
コロナ後の会の盛況冬ぬくし　田中　悦子
狐火をマイクの指示で飛ばしたり　なつはづき
ただいまとつぶやいてみる冬温し　栗原嘉一郎
いい人だったと言われなくたって冬ぬくし　桐山　芽ぐ
ショーウィンドーのマネキンの笑み冬温し　大西　惠
霜の声拾ふマイクの神さぶる　菅沼とき子
冬ぬくし音符の切り絵教室に　堀口みゆき
冬ぬくし渚に椅子を遊ばせて　植田いく子
冬温し右手を隠す龍馬像　野木　桃花
虎落笛ＡＩマイクは拾えない　朧　潤
冬温し金波銀波のサーフィーン　渡辺　正剛
文机に揺るる日の影冬温し　大本　尚
異次元の地球とつきあい冬温し　斎藤佳代子
冬ぬくしマイクまわせば十八番出る　芳賀　陽子
冬温し四日間の休戦日　岡田　恵子
ビルの間に日の差す川面冬ぬくし　須貝　一青
女狐がマイク片手にワンツースリー　長島喜代子
ひとり身の老の恋めく冬ぬくし　藤方さくら
冬温し水上バスに手を振れり　三沢　容一
食い溜めて長き眠りや冬温し　髙島　章生

隣席の句友の瞳冬温し　比留間加代
冬温し夫の手擦れの季寄せ手に　栗林　浩
こそばゆい水洗ノズル冬温し　吉村　元明
電話の向こを安否の息子冬温し　横田　紀子
冬に入るマイクの声は青年で　米田　規子
冬温し夫物忘れ多くなり　渡辺　美保
テラス席に鳥影高く冬ぬくし　村田ひとみ
冬温し柚子と日差しのハーモニー　栗林さと子
温暖化愛おしく響く「冬温し」　鈴木　圭子
冬温しマイクの乾く大ホール　佐藤　久
代表を務めるマイクの悴める　町野　敦子
マイク憎ししどろもどろの開戦日　山崎　妙子
陸軍歩兵新倉八五郎の碑冬ぬくし　石鎚　優
冬温し用水の鯉遡る　永井　朝子
冬ぬくし朝刊コトン眠れぬ夜　三橋　伸子
冬温しついねんごろに胡麻叩く　日置　正次
冬温し旗を振る人並ぶ人　佐藤　廣枝
冬ぬくし父と笑った散歩道　安藤久美子
自販機の水よく売れる冬ぬくし　若林つる子
散りぢりになりて呼び合ふ冬温し　川村　研治
地球より戦の風や冬ぬくし　渡辺　和弘
冬温し夢は幻旅の帰路　村上　裕也
別れには流儀なんて無い冬温し　つはこ江津
ウクライナもガザも片仮名冬温し　麻生　明
マイクテスト　マスク不要の声「アーアア」　佐々木重満
冬温し二人っきりで読む句集　宮永　武彦
冬温し上着のボタン外しをり　杉山由紀子
味噌汁の湯気にほっこり冬温し　廣崎　龍哉
初めての草履脱ぐるや冬ぬくき　藤田　裕哉
拙き句褒めそやされて冬温し　多久島重宏
花嫁は妹マイク冬日差　水村　礼子
マイクのテスト中冬温し　三上　泉
三打数二安打パチンコ冬温し　田畑ヒロ子
冬ぬくし図星指されてたぢろがず　小川　竜胆

諸家近詠（到着順）

ゆだちくる　中尾　美琳（詩あきんど）
ゆだちくるスクランブルの交差点
蝙蝠の耳たたみけり真夜の玻璃
麦秋の錆びゆくにほひ照準器
青猫の青の淋しさ聖五月

生きるとは　水島すすむ（無所属）
生きるとはすなはち汚染秋澄めり
みちのくの旅の涯なる白露かな
星走る縄文人の遺跡群
幾重にも折れて修験の登山かな

徘徊　諸角　和彦（無所属）
ひらがなのやうに老けゆく里の秋
暮れなづむ不二茫茫と秋夕焼
逃水てふうはつつらの人世か
徘徊か野遊びかいまその途中

折り畳む　町野　敦子（山河）
身のこなし良き人といて草の花
括られてコスモス尚も発信す
烏瓜長き不在を折り畳む
草雲雀昨日と同じ朝がくる

無色　山田ひかる（山河）
地学部は一階の奥冬ぬくし
一瞬で点る電飾開戦日
山法師今日は無色の金曜日
七月を遠近法で描けば水

山田　貴世（波）
養生というては今日も月見酒
無骨さも一つの味や榠樝の実
夜長し一つ燈に居て好き勝手
雨の日は雨の歩幅や秋深む

二〇二三年　宮原　純（衣の会・祭演）
スクラムの汗信頼の色になる
家康の迷い加えて根深汁
震災百年枯れて立つプラタナス
冬芽にも声を掛けたか万太郎

初冬の富士　小林　梢（茅ヶ崎）
晩秋の落ちる早さや砂時計
秋澄むや初冠雪の富士の山
裾野まで見えて富士山晴れの秋
秋晴れのくつきり富士の裾野まで

涅槃の日　山崎　妙子（岳）
庫裏に干す大き俎板涅槃の日
頷きは百の言葉やひこばゆる
春驟雨祈りを解かぬ岬馬
無表情といふも表情蟇

十三夜　川野ちくさ（蛮の会）
送り出す最後の客や盆の月
プラごみのふんはり軽し草の花
連弾のぴたり終了桐一葉
白々とシヤツター通り十三夜

無患子　白石　有清（無所属）
朗朗と歌の降り来て秋澄めり
木賊垣観音像は玻璃の内
無患子をまず見上げたり深大寺
銀杏の三粒拾いて家路かな

友達に　山下　遊児（波）
牛蛙兜太の声で鳴きにけり
友達になれる気がする青大将
空耳と思へば秋の蚊の爆音
空爆の無き世の中の赤とんぼ

月祀る　八木　和子（無所属）

混迷の星に生まれて月祀る
禍の国へ帰るもあるや渡り鳥
こはごはとジビエ料理にきのこ汁
秋寂ぶや塚に鎌倉栄枯譚

神谷　純子（無所属）

秋の雨レンタル傘の軽さよし
文化の日復刻版の旧漢字
冬帽子おもわず声をかけそうに
冬木道ここから先はひとり行く

白い函　三上　泉（無所属）

水道管の穴見え透いた嘘　冬
王者ヒマラヤ杉のど真ん中
掛け違えたボタンで年暮るる
天球か白い函註に匿す

天狼星　武良　竜彦（小熊座）

虹色の貝を遺骨とせし八月
ひまはりや今も俘囚の日本あり
天狼星ナイルも我も氾濫期
冬瓦斯燈富国強兵の夜の底

冬来たる　村上　裕也（蛮の会）

晩秋の嘆きの壁や飛田新地
赤ちょうちん踵を返して温め酒
通勤の歩く速さや冬来たる
靴音の研冴えたる丑三つ時

新会員紹介欄

落ち栗　中村まさえ（無所属）

落ち栗や雁田山へと続く道
一向（ひたすら）に黙して栗むく二人かな
栗むきて甘露煮を待つ夫（つま）の笑み

春光　鶴田　静枝（朱夏俳句会）

バスの窓春の光のあたる席
うららかやなんでもない日のお赤飯
万緑に遺伝子が触れ泣きそう

方寸　荒　理依子（無所属）

土筆野やムーミン谷へ帰る雲
たはむるる風の手の平秋の蝶
寒月や蔵方寸の明り取り

現在の「座」の文学

会長　尾崎　竹詩

俳句は昔から「座の文学」であるといわれています。江戸時代の「座」は、一人の宗匠が居て連句を捌いたり発句の添削をしてくれるのが通常でした。明治時代の正岡子規以降は論争、口論が多くなりました。これは命がけで自分の俳句の正しさを主張するという意味で俳句の発展進化に貢献されたことはだれもが認めることだと思います。

しかしこれからの「座」は江戸時代や明治以降の「座」であってはならないと思います。俳句経験者にも初心者にも俳句を学ぶ権利や楽しさが保証されるべきだと思います。また自分の目指す俳句と方向が違うから駄目だと否定されるべきではないと思います。

金子兜太の言う「俳句自由」はそういうことだと思います。現在俳句人口が減少しているのは俳句の楽しさを「座」が保証できていないからではないでしょうか。強く自省したいと思います。

サミット短信

辻堂句会　**伊藤　梢　報**

第三〇二回　於・明治市民センター　令和5年9月30日

秋澄めりすいっと走る裁ち鋏　土岐　詳恵
遥かより辿り着きたり秋の口　生田　暁美
彼岸花約束どほり会ひにきし　石鎚　優
山に湧き青に揺らめく水の秋　岩田　信
大粒の雨のドラムや野分来し　奥村　純子
満月に木霊言霊踊り出す　金栗トモ子
情報戦飛び交う電波鰯雲　佐々木重満
秋袷未だ半身はなりきれず　田畑ヒロ子
十六夜の風ふところに髪を梳く　長島喜代子
道すがら雲を追いかけ秋の風　中村まさえ
老老をいかに生きるか草の花　野口美穂子
鰯雲気になっている骨密度　平山　圭子
道なり歩む花野や花踏まず　廣田　洋一
露草の踏んで行く子の消えにけり　藤方さくら
秋夕焼老いのひと日のいとほしく　星　由江
むら雲をけんけん遊ぶ望の月　柳　蒼柳
伎藝天秋こそ微笑のこぼれけり　渡辺　正剛
曼珠沙華想いを受けとめる形　伊藤　梢

第三〇三回　令和5年10月28日

海底を一生知らぬ秋鴉　安藤　靖
死火山といふ友ありき芒の穂　石鎚　優
青空に残る豆柿ころころと　岩田　信
金秋や加賀友禅の筆さばき　占部美土子
八冠の頭脳回路や天高し　岡田　良子
秋深しジムに汗かく萎えし足　奥村　純子
散る紅葉着地は表なりにけり　金栗トモ子
山粧う世代交代準備中　佐々木重満
四阿に深秋の人ペンを取る　土岐　詳恵
さんざっぱらしゃべりまくって秋は行く　長島喜代子
朝一杯コップに宿る水の秋　中村まさえ

ほろ酔ひや色なき風に吹かれをり　野口美穂子
強過ぎる自己主張あり栗の毬　平山　圭子
長き夜の絵の無い絵本語りだす　藤方さくら
頬杖の外れ秋思の始まれり　星　由江
黄昏の蜩鳴くやあす想ふ　柳　蒼柳
唐辛子燃えるものみな朽ちてゆく　渡辺　正剛
穂芒の真っ直ぐに立たねばならぬ　伊藤　梢

◎連絡先…事務局芳賀陽子まで

みなとみらい句会

菅原　若水　報

第四〇三回　於 社会福祉センター　令和5年9月9日

和太鼓の一打に続く秋の空　岩田　信
和算にも微分積分秋灯下　金栗トモ子
白桃や和音のごとく並べ置く　坂　守
和え物の白く整い秋まつり　里見　美季
人権も平和も捨てて文化の日　菅原　若水
平和です一期一会のとろろ汁　長島喜代子
ありのみや奥歯に違和感おいてゆく　芳賀　陽子
曼殊沙華向う三軒昭和族　藤方さくら
山下公園二百十日の明烏　三沢　容一
をりふしの老鶯臥せし母和む　吉村　元明
台風来猫の片目が青光り　若林つる子

第四〇四回　令和5年10月9日

秋の夜にムンクの叫びを聞く銀座　石川　夏山
プーチンの笑顔の握手うそ寒し　岩田　信
生き下手で忖度下手で螻蛄鳴けり　金栗トモ子
鳥渡る空に近道ありやなし　里見　美季
十月や筋肉を信じてみるか　菅原　若水
満月を両手で掬っている湖畔　長島喜代子
手垢つくことばは弾く鳳仙花　芳賀　陽子
坂多きみなとみらいの昼の月　藤方さくら
鰯雲幼馴染みに会ひに行く　三沢　容一
ピンポンマム想い通りにゆかぬ恋　吉村　元明
手がかりの熟柿は青柿を知らず　若林つる子

第四〇五回　令和5年11月5日

年寄の笑ふ数だけ秋があり　岩田　信
どんぐりに復讐されて転びそう　上野　京子
感電をするまで登る葛かづら　里見　美季
小春かな寄席の笑ひに癒されて　菅原　若水
膝小僧寄せてゲームや神無月　長島喜代子
投げ網やきらら秋光たぐり寄す　芳賀　陽子
二つ三つ煩悩を捨つ烏瓜　三沢　容一
締切の重荷ひしひしちちろ虫　渡辺　正剛

◎連絡先　菅原若水　s-shinya@s6.dion.ne.jp
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

星川句会

金栗トモ子　報

九月　令和5年9月4日

身に入むや暮れゆくものにある順序　麻生　明
こほろぎのまねをして鳴くピエロかな　石鎚　優
父と来た蕎麦屋に一人盆の風　大塚　真紀
麦の穂や団子屋の旗色あせて　桐山　芽ぐ
麦めしにたまごなっとうとろろ汁　栗原嘉一郎
残る蝉手話教室の黙に熱　里見　美季
蝗跳ぶ仮面ライダーになるために　菅原　若水
並び順変えた本棚秋の風　藤原真理子
燕麦の発酵すすむ諏訪の夜　渡辺　順子
捨てきれぬ麦藁帽にリボン付け　金栗トモ子

十月　令和5年10月2日

しおからとんぼ名は火山と名乗りけり　石鎚　優
地鎮祭のお祓いバッタの跳びし土　桐山　芽ぐ
秋場所や若武者に「アレ」熱海わく　栗原嘉一郎
柿の秋土蔵に影のやわらかく　里見　美季
露寒し悔ゆることのみ多かりき　菅原　若水
一陣の風を素直に鰯がとぶ　長島嘉代子
喜寿となり素顔で生きんとろろ汁　金栗トモ子

十一月　令和5年11月6日

水澄んで国の微震はおさまらず　麻生　明

俳人交遊録　第十五回

齋藤愼爾さんのこと

松下　カロ

齋藤さんから電話がかかってきた日のこと。あの少し焦ったような話し方で「あなたの書いたものを読んでいます。良いです。本出しましょう」と言ってくださいました。嬉しかった。本を出すなら齋藤さんの深夜叢書から出したいな、と思っていました。でも、怠け者のわたしは何の行動も起こしていませんでした。初めて会った時、ご飯をご馳走してもらいました。お店へ歩いてゆく途中、齋藤さんは「もっとこっち歩いて。危ないから」と言いました。齋藤さんに後ろから見られてちょっと息苦しく、つい危ない方へ寄って行ってしまいます。それで齋藤さんは何回も「もっとこっち歩いて」と言いました。

二〇一六年、評論集と句集を続けて出してもらいました。お礼を言うと、齋藤さんは斜め上を見て別の話を始めました。齋藤さんはシャイな人でした。新年会や集まりにも誘ってもらいましたが、あまり出席しなかったので「あなたは出不精だな」と笑われました。齋藤さんは大事な人でしたが、離れているほうが気楽でした。

亡くなる少し前にも電話をくれて「また一冊出しましょう。あの原稿良かったから入れてください」と言われました。わたしは自分のその原稿が嫌いでした。そう言うと、齋藤さんはやっぱり笑いました。わたしは齋藤さんに逆らってばかりいましたが、それは齋藤さんに向かうとわたしもシャイになってしまうからだったのです。

シャイな齋藤さん、本当にありがとう。

シャイなカロより

思春期といふ裸像あり菊蕾む　石鎚　優
農園は人手に渡り柿実る　大塚　真紀
指で計る血管年齢返り花　桐山　芽ぐ
柿食えばふるさとの丘鬼ごっこ　栗原嘉一郎
時止める不思議な少年冬の凪　菅原　若水
茶柱は朝の占い小鳥来る　長島嘉代子
新走り檀家もてなす老和尚　藤原真理子
ひとりシーソー秋風の通過点　里見　美季
鳥帰る炸裂音のなき地へと　町野　敦子
小鳥来て休日球場恋いまま　渡辺　順子
七十路の元気印に枯葉舞う　金栗トモ子

◎毎月第一月曜日　星川駅下車「かるがも」または「アワーズ」で開催。
◎連絡先：事務局芳賀陽子まで

丹沢句会　竹村　半掃　報

順不同・秦野市西公民館

八月

蟷螂のファイティングポーズ鎌の先　尾崎　竹詩
スクラップブックより紛失　終戦日　竹村　半掃
胎内に曼荼羅ねむる朧月　佃　悦夫
秋出水地球の地軸傾けり　北村　文江
底紅一枝今朝の仏壇いと清し　立石　采佳
白桔梗、「アシタノキノウオイデナサイ」　與　起
散る時の想定はなし百合ひらく　加藤かほる
阿夫利嶺に座礁の雲や汗拭ふ　加藤　三眠
とんぼとんだけとんぼとんだとんびとんだ　羽田　勝二
「人新生」に入りし惑星熱帯夜　渋谷　徹
老いの坂釣瓶落としとつゆ知らず　篠崎　妙子
くちなわや未完のままの地獄門　長谷川昭放
撮影者うつらぬ写真原爆忌　岡本　保
滝壺に落ちる刹那を聞き漏らす　田畑ヒロ子
木魚の音に鉢蓮開くかな　佐々木重満
振りかへるまでは曖昧草蛍　二上　貴夫
鬼灯ならす高齢にして反抗期　芳賀　陽子
水着せし女学生をまぶしめり　酒井　天敏

九月

秋の風失恋いつも相似形　佐々木重満
藁屋根〈遠流ヲ想ィウズクマル　與　起
尾骶骨尻尾の名残りねこじゃらし　田畑ヒロ子
鬼女舞ふや異界めくかな大山能　北村　文江
名月に覗かれている寝姿山　長谷川昭放
砂日傘ビーサンの町色褪せず　三橋　伸子
よせいだいじよせいたのしもとせみのなく　羽田　勝二
男らしさとはガブリと梨を食う女　尾崎　竹詩
郭公よ悪三昧になってやる　佃　悦夫
現なるあふなあふなの銀河かな　二上　貴夫
〆に食う杏仁豆腐秋暑し　加藤　三眠
回転する光の渦よ秋の蝶　立石　采佳
氷柱になりたきこの身四十度　加藤かほる
地球規模山火事砂漠化霍乱や　杉本　弼
不条理は足し算だったちちろなく　竹村　半掃

十一月

ボージョレー・ヌーボー・八百八町やなぎ腰　與　起
あきのひがポトンとにしのいどにおち　羽田　勝二
照紅葉湖面の富士の動かざる　渋谷　徹
落ちた蟻平手で掬う多き悔い　杉本　弼
冬に入り水底の影鎮もりぬ　田畑ヒロ子
混迷の凍し世胸にガラスペン　竹村　半掃
刻々と人死ぬニュース茶が咲けり　加藤かほる
北山しぐれ山姥ついと首を出す　菅沼とき子
さざんかや帽子とばして兄を追う　飯田美枝子
酉の市貧乏神のオロオロと　佐々木重満
雨風の生温し冬の蚊黒し　立石　采佳
人間のすべってころんで枯れていく　篠崎　妙子
極東の猫春眠す朽ちるまで　佃　悦夫
短日や四十七士の墓の前　長谷川昭放
報道に死者や瓦礫や小六月　岡本　保

◎連絡先：長谷川昭放　080 5013 6618
kumonomine100ku@mk.scn-net.ne.jp

【結社便り】　第十二回

「詩あきんど」　主宰　二上　貴夫

中尾　美琳　記

「詩あきんど」の創刊は二〇一二年。それ以前からやっていた俳句・連句を一つにまとめて掲載する結社誌を年三回発行することになった。

お陰様で昨年十周年を迎え、細やかながら応援して下さる方々と記念の会を催すことができた。

句会は月一回、伊勢原・秦野・小田原・藤沢・日野・本社句会（秦野）、Ｗｅｂ句会。その他に大山の松鈴庵で連句会をやっている。

年間行事として毎年四月の第一土曜日、宝井其角の墓所がある伊勢原市上行寺において「晋翁忌」を修し連句興行を張行。

会員作品

発情期なきやヒト科に雑の恋　二上　貴夫
十二月八日あ、録画わすれてた　竹村　半掃
薇の「の」の字を廻す螺子回し　矢崎　硯水
ぶらさがる自由のありや初茄子　佐野典比古
日中の駅長長回廊を影と逝く　木村　萄
秋冷や指示待ち人となる夜更　中澤　柚果
晩秋って四分休符の一個分　いけ　まり
時雨忌や枯野の花をさがしゆく　立石　采佳
林檎剥き明日の活計たづねけり　桑野コワシ
秋の蝶みている背なに「ごはんだよ」　小巻この葉
「新戦前」誰が言ったか早や七日　中尾　美琳

発行所「詩あきんど」（見本誌差し上げます）
〒二五九－一三二四
神奈川県秦野市千村四の四の二〇
二上貴夫方
携帯電話　〇九〇（九〇一六）八八五一

◎毎月第三金曜日、午後一時より原則、西公民館で開催。小田急線、渋沢駅より徒歩7分。

川崎句会　　山田　ひかる　報

於・川崎市総合自治会館
令和9月16日(土)

九月

生きてゐることが倖せ敬老日　青島　哲夫
首塚に置くとっくりと女郎花　麻生　明
天国へ行く道知らず曼珠沙華　植田いく子
もう何もいらぬと思う良夜かな　加賀田せん翠
山なみの向こうに秋の潜みたる　斎藤佳代子
萩の風百段階段軋ませて　佐藤　鈴代
山一つ越ゆる旅の湯秋の風　佐藤　廣枝
ギロチンは首が大好き西瓜抱く　菅原　若水
首つ丈と言われ晩夏の藍暖簾　関戸　信治
玄関に漬物石や秋安居　ダイゴ鉄哉
寝違へた首の一日残暑かな　三沢　容一
八十億の渇きを地球に置く九月　武良　竜彦
寄り合えば昭和の話夜長の灯　吉居　珪子
一錠に水のざわつく秋夕焼　山田ひかる

十月　　令和5年10月21日(土)

黒ぶだう色の濃きほど美味しかる　青島　哲夫
うすら寒年令証明見せて入る　麻生　明
噛んだ指燃える手もあり秋の夜　石川　夏山
日帰りの温泉マップ萩の花　植田いく子
萩しずか指より何か零れけり　加賀田せん翠
朱とグレーあわいで迷う鰯雲　斎藤佳代子
看護師の白き指先月明り　佐藤　鈴代
とんぼの空平和の反対何〜んだ　佐藤　廣枝
指折りて幸数うれば秋の山　菅原　若水
三日目は二日後ですハロウィン　関戸　信治
パソコンに何書くでなく秋流れる　ダイゴ鉄哉
秋高し指差し確認三回目　花澤ちいこ
海ほほずき鳴らして祖母は古典なり　三沢　容一
秋時雨学徒出陣八十年　武良　竜彦
木の実あれば拾いたくなる吾縄文人　吉居　珪子

十一月　　令和5年11月18日(土)

紅葉山に人影走る胃痛のごとく　麻生　明
この道もいつか野菊に辿りつく　植田いく子
固き爪飛び立冬のカレンダー　加賀田せん翠
落葉踏む走り根あっちにこっちにも　川島由美子
さざんかや育児介護も走り去り　佐伯　悦子
夕方と夜の間の花八つ手　斎藤佳代子
瞬間を無限に重ね年尽きる　佐藤　鈴代
間引菜を和えて主菜のひとり膳　佐藤　廣枝
非戦てふ平和の重み敷松葉　菅原　若水
香車にて王討ち取った冬日向　関戸　信治
死はいつも隣りにありぬ石蕗の花　ダイゴ鉄哉
大南瓜腰の決まらぬ猫車　芳賀　陽子
間の悪きこと多かれど小春かな　花澤ちいこ
小春かな二駅だけの電車旅　間島　直美
紅葉の万華鏡なりいろは坂　三沢　容一
終点が秋天ならば走り抜く　武良　竜彦
明烏今朝は寒いと告げに来る　吉居　珪子
間を置いてそっと一言竜の玉　山田ひかる

◎連絡先：事務局芳賀陽子まで

湘南サンシャイン句会　　堀口　みゆき　報

藤沢市民活動推進センター二階会議室

第93回サンシャイン句会　　9月1日(金)

遅れ来し小鳥欠席裁判さる　安藤　靖
遠方の友のかはりに台風来　石鎚　優
漆喰と梁の際立つ野分あと　荻野　樹美
語らうか夜学帰りの中華そば　菅原　若水
コスモスの怒涛のような日なりけり　田畑ヒロ子
台風や目玉おやじの眼はひとつ　芳賀　陽子
いつか俺も乱れし日本語柘榴落つ　日置　正次
台風去る家族の絆だけ残し　保里よし枝
台風の目の中にゐてペダルふむ　馬来まち子
大緑蔭深海にゐるここちして　山口　愛子
山積みのペットボトルや晩夏　山下　遊児
台風が欲しいと思ふ日々である　渡辺　正剛
野分後犬ほめ合へる声大き　堀口みゆき

第94回サンシャイン句会　　10月6日(金)

決断の買物シャインマスカット　青木　敏行
廻廊の水びたしなり虫の声　安藤　靖
両の目に秋の空ある埴輪かな　石鎚　優
ゆっくりと熱き焙じ茶新松子　荻野　樹美
刈田には宴の後の寂しさよ　菅原　若水
人に会わず虫時雨の中に居る　田畑ヒロ子
空家点々谷へ手招く猫じゃらし　芳賀　陽子
自分史は少しドラマ化月のぼる　日置　正次
空箱の隅の指あと秋思なる　保里よし枝
声出して声欄を読む今朝の秋　馬来まち子
独り居のつくづく独り夜の長き　山口　愛子
空耳を思へば秋の蚊の爆音　山下　遊児
時間感覚鈍ってきたりまんじゅしゃげ　渡辺　正剛
茸狩グリム童話の中に入る　堀口みゆき

第95回サンシャイン句会　　11月3日(金)

学舎の木洩日に舞ふ雪螢　青木　敏行
明日来る人を待てずに萩の散る　安藤　靖
穂すすきや学生服のソクラテス　石鎚　優
同好の合い寄る旅や神の留守　荻野　樹美
勤労感謝の日そう思ふなら金を呉れ　菅原　若水
新米や「今年限り」と太い文字　田畑ヒロ子
菊人形みなやさしいだけでなく　日置　正次
秋時雨腕に前夜のやけど跡　保里よし枝
寒雷の同時多発テロのごと　山下　遊児
石蕗やしたたか老いの花咲かす　渡辺　正剛
釣糸の緊張長し小鳥くる　堀口みゆき

◎連絡先　堀口みゆき
miyuhoriguchi@yahoo.co.jp
TEL 090　3914　0568

インターネット句会

宮永　武彦　報

八月句会

八月やひとかたまりの雨が去る　渡辺　順子
銀やんま空のひろさを言いにくる　平田　薫
発心の蛇衣脱ぐに手間取りぬ　金栗トモ子
崩壊ははじまっている酔芙蓉　石川　夏山
炎暑のベンチ忘れられたる鍵の束　桐山　芽ぐ
秋刀魚食ふ明日の秋刀魚を憂ひつゝ　多久島重宏
水底の影まで掬ふ夜店かな　江原　文
訛りある言語かき分け大花火　町野　敦子
夕蝉の声のさまざま一日了ふ　田中　治夢
海の日やいま北斎の涛のうえ　吉村　元明
天高しあしたも生きてみようかな　菅原　若水
賛成ということにして黒ビール　麻生　明
今朝に消す昨夜の泪花木槿　佐々木重満
年ふるやペルソナひとつ秋風に　矢口　椛子
いつの間にぐっと大人ぶ鳳仙花　須藤　節子
羽ばたきをして入道雲に招かれし　石鎚　優
鰯漁命のバトン受け取って　宮永　武彦

九月句会

焼き鳥屋の二階が塾でかなかなかな　桐山　芽ぐ
夢見しは空飛ぶ箒敬老日　金栗トモ子
秋鯖の口よりボスポラスの夕日　町野　敦子
夕焼に染まる水母の泪かな　石川　夏山
棒きれに人の匂ひの案山子かな　渡辺　順子
芒野が富士の裾野を引き受ける　麻生　明
木の上のその上秋がそよそよす　平田　薫
生き直そうか雀蛤となる　菅原　若水
小春日や白寿の母に紅を刷く　吉村　元明
星流る十七歳の志願兵　江原　文
白粉花（おしろい）に一期一会のありしこと　石鎚　優
神仏適薬適量曼珠沙華　矢口　椛子
紫百日紅思春期にある煩悶か　佐々木重満
秋晴や雲なかりせば山遠し　多久島重宏
曼珠沙華女の情念身を焦がす　須藤　節子
夏果てぬ斜面をちこち蝉の穴　田中　治夢
同行は千の木の葉や高尾山　宮永　武彦

十月句会

実石榴が石になるまで待つ地蔵　石川　夏山
未完の絵花野にイーゼル立てしまま　吉村　元明
露葎出さずじまひの文やぶる　矢口　椛子
風よりも先にうまれた白式部　平田　薫
彼岸花いつしかここが好きになり　町野　敦子
流星の余白一丁目一番地　金栗トモ子
この先も不束に行くをみなへし　渡辺　順子
ハイヒール音カツカツと夜の木犀　江原　文
初紅葉嫉妬にもある沸点　菅原　若水
小鳥来る自由な空を持て余し　須藤　節子
青春期いつも山霧通過中　佐々木重満
秋の暮女の旅のよく歩き　桐山　芽ぐ
永遠（とわ）の秋閉じ込め柿渋バックかな　田中　治夢
穂芒や母胎にありし空の青　石鎚　優
長生きの郷にざわざわ稲雀　麻生　明
半分に割る錠剤や夜の長し　宮永　武彦

◎投句、選句、選評すべてインターネット上で行っています。毎月第三月曜日投句〆切。
連絡先　宮永武彦　takehikom0410@gmail.com

磯子凪句会

尾澤　慧璃　報

於横浜市社会教育コーナー

九月

秋夕焼素通りできぬつけ麺屋　池田恵美子
秋の夜の盤上の駒白熱す　村上　裕也
一匹は戸袋にをり鉦叩　鹿又　英一
幸福といふ不意打ちや栗ごはん　佐藤　久
白々とシャッター通り月今宵　川野ちくさ
網鬼灯あの世の風の通ひけり　長濱　藤樹
高階の後期高齢鰯雲　伊藤　方恵
秋扇や時間通りに来ない人　尾澤慧璃

◎会場…横浜市社会教育コーナー研修室C
（JR磯子駅より徒歩4分）
◎日時　奇数月の第4水曜日13時～
◎連絡先　尾澤慧璃　kinglovestea@gmail.com

金八句会

杉　美春　報

九月

手を引かれ蜻蛉怖がる子供かな　尾澤　慧璃
大気圏のフルスイングや野分立つ　村上　裕也
中空に浮ぶみほとけ盆の月　扇　義人
豪快にちやんちやん焼の鮭一尾　松浦　泰子
扇風機世紀を越えて首を振る　中村　光男
木の家に畳のにあふ水の秋　神谷　純子
きしきしと午後の消耗秋扇　里見　美季
とつぷりと島濡れてゐる秋日かな　佐藤　久
曼殊沙華蕊から闇の降りて来る　杉　美春
烏瓜ひとりに慣れる深呼吸　なつはづき

十月

弓月や心ゆるまる下駄の音　神谷　純子
三つ編の騎馬の大将天高し　松浦　泰子
父と子の声する風呂場月の秋　尾澤　慧璃
潮入の鰡の跳びたる夕日かな　佐藤　久
ガウディの曲線ゆかし天高し　扇　義人
学童の歩み止めたる角力草　村上　裕也
秋あざみ息継ぎなしに雲の来て　なつはづき
複雑な手相の話秋の夜　中村　光男
流木に赤子を置きてスマホ秋　石鎚　優
鳥渡る雲の五線譜弾きながら　杉　美春
どんぐり落ち巨大化石が目を醒ます　里見　美季

◎毎月第二金曜日　夜8時より。ZOOM使用
◎連絡先　杉美春
miharusugi@j.com.home.ne.jp

会員新刊案内

小池義人句集『星空保護区』（山河叢書36）

植田いく子　記

第一句集『ことば実験室』から八年、第二句集『星空保護区』が上梓された。「あとがき」には「多分最後になるであろうこの第二句集を編んで定年後の豊かな時間を与えてくれた俳句という文芸と、俳句を通じて知り合えた師や友人たちに感謝しすでに生活の一部ともなっている自身の俳句を記録しておこうと考えたのである。」と記され、また今年五月に逝去された敬愛する松井国央前山河代表への哀悼の意が表されている。

一切を拒否して毛虫焼かれけり
春月の影に怯える肩の凝り
指笛のこだまが返る牧開き
草蜉蝣みんなどこかへ行く途中
沖縄忌雨水の溜まる滑走路
緑陰や楷書のような手話を聴く
まだあてにされる腕力蔓たぐる
薬飲むためにもの食う豊の秋
雪蛍宇宙は見えるところまで
白鳥来音声一部変えてます
ふるさとは星空保護区霜むぐら

日々の生活の一齣をさり気なく詠み、繊細な心の動きや情景が等身大で語られている。悲壮感や怒りを声高に言わず、穏やかで静かな視点から紡ぎ出された句群は自在で優しい。真摯で前向きな姿勢は社会に対して身の回りの全てに対していつも開かれている。その懐の深さが周囲に変わらぬ安心感を与えている。何気ない日常から立ち上がってくる俳句はじわじわと心に染み入ってくる。

結びを飾る一句。

結婚五十年静かに祝う切山椒

益々のご健吟をお祈り申し上げます。

【新しい風】　神奈川の若手俳人（第九回）

成宮　楓

「冬の沈黙」

秋の海本の背表紙押し戻す
糸瓜垂れやっと本音を吐きました
鰯雲真空パックされており
長所だけ思いつかない枇杷の花
春うらら奥歯で砕く睡眠薬
永遠が胡坐をかいており九月
化学記号の直立薄暑の夜
春浅し無音のパトカー近づいて
少年はまだ夕焼けを削いでいる
おもちゃ箱いっぱいの冬の沈黙

私の師匠は、俳句はもちろん、イラストを描くのも上手い。毎年、年賀状にアニメのキャラクターを描いて送ってくれる。大人になっても嬉しい。そんな師匠との出会いは小学五年生。友達の紹介で「近所に絵の上手いママさんがいる」というものだった。私は、イラストを描く技術を習うべく師匠の家に足繁く通った。しかし、イラストの描き方ではなく俳句を教えてくれた。そして現在にいたる。

今でも時々、俳句が上手く出来ない時等に、「おかしい…俳句をやる予定はなかったのに…」と思う事があるが、この不思議な出会いと縁に身を委ねてみようと思う。

成宮　楓　プロフィール
横浜生まれ。中学三年生の時、文芸大会中学生の部において優秀賞。この頃より作句開始。
一九九八年現代俳句協会入会。「祭演」同人。

西部ブロック（丹沢句会）吟行会報告

長谷川昭放　記

「大磯城山公園と旧吉田茂邸を散策」

日　時　令和五年十月二十日（金）
吟行地　旧吉田茂邸と旧三井別邸地区
句会場　大磯町郷土資料館
講　演　なつはづき先生
演　題　「少しだけ未来の俳句―ＡＩは友達？それとも……」

暦の上では既に晩秋にも拘わらず、当日は汗ばむほどの晴天に恵まれました。

吟行地が二つの地区に分かれていましたが、参加者は話題と句材の豊富な吉田邸に集中したようです。吉田邸は十四年前に漏電で全焼、六年前に再建され一般公開されています。嘱目には邸内までしっかりと観察された様子が鮮明です。一位から十五位までを掲載しました。味読して下さい。

講演は、第36回現代俳句新人賞、摂津幸彦記念賞受賞、現在、協会研修部長として活躍中のなつはづき氏。演題は標記の通り大変時宜に適ったものであり、実際にＡＩロボット一茶くんとの句会経験も話され好評を博し、質問者が四人も出ました。

懇親会に十八人、全体で二十九人の参加者でした。

入賞者（一位～十五位まで）

浴槽は舟の形や月へ漕ぐ　杉　美春
秋声やもう繋がらぬ黒電話　八木　和子
新松子昭和へつなぐ黒電話　関根　洋子
戦後史は私の歴史残る虫　尾崎　竹詩
書棚にある昭和の骨格天高し　佐々木重満

「バカヤロー」は昭和の一声萩の風　北村　文江
宰相の椅子ふかぶかと秋の潮　土岐　詳恵
あばら骨晒す秋天茂の忌　なつはづき
柘榴裂け今戦前にもどりつつ　芳賀　陽子
縄文土器煮炊きの匂う秋の昼　田畑ヒロ子
潮風や漣となる群れ蜻蛉　加藤　三眠
隈笹のなびけば律の調べとも　菅沼とき子
先端か尾っぽか秋の雲伸びて　麻生　明
ワンマンの七賢堂から秋声　長谷川昭放
叱責の声は秋風像の黙　酒井　天敏

吉田茂像の前で

講演　なつはづき氏

会場風景

（撮影：竹村半掃）

冬の一句

（撮影：佐々木重満）

大島も富士も影法師寒苦鳥　猪狩　鳳保
渦を巻く十の指紋や冬に入る　中山　妙子
凩や最後の一葉剥れそう　加藤　三眠
大寒や何も羽織らず月仰ぐ　内田ゆり子
道の辺に紫に咲く冬菫　大山　賢太
青春といふ詩語ありき鳰　石鎚　優
冬の川空白だらけの時刻表　町野　敦子
致死量に足りぬ冬星ロゼワイン　藤方さくら
手の内を見せぬ冬帽膝に置く　安藤　靖

＝地区動向・消息＝

1. 10月20日(金) 西部ブロック吟行会 29名参加
   大磯城山公園と旧吉田茂邸の散策
2. 10月31日(火) 副会長会議 組織について
3. 11月3日(金) 現代俳句協会全国大会 東天紅
4. 11月24日(金)
   神奈川県現代俳句協会第40回俳句大会
   かながわ県民センター 97名参加
5. 12月1日(金) 湘南ブロック吟行会 51名参加
   新林公園散策
6. 12月11日(月) 三役顧問会議
   今年度の事業報告、次年度活動計画、規約改正について
7. 新会員紹介
   大槻　小葉　鎌倉市
   平野セイコウ　小田原市
   芹澤しょう子　川崎市麻生区
   忽那　洋子　横浜市戸塚区
8. 新会友紹介
   赤嶺　茂光　横浜市金沢区
   岩渕　美帆　横浜市鶴見区
   谷川冨美子　横浜市港北区
   横山　幸子　横浜市保土ケ谷区
   三宅深夜子　横浜市都筑区
   生田　暁美　藤沢市
   占部美土子　藤沢市
9. 会員の動静
   古野　昭久　横浜市旭区（地区内移転）
   田中　順子　川崎市多摩区（熊本県より転入）
   小林　梢　町田市（会友のまま）
10. 逝去謹悼
   西田みつを　横浜市　令和5年5月
   木村　和彦　小田原市　令和5年7月
   らふ亜沙弥　横浜市　令和5年10月

《編集後記》

◎俳句大会は盛況のうちに無事終了しました。実行委員長をはじめ各担当者の連携・協力の素晴らしさに改めて神奈川県現代俳句協会の底力を感じました。

◎会報163号では「春の一句」を募集します。編集人までご投句ください。2月20日締切です。

発行所　神奈川県現代俳句協会
発行人　尾崎　竹詩
編集人　杉　美春
〒252・0325
相模原市南区新磯野4-4-1-506
電話　090・6534・1452
Eメール　miharusugi@jcom.home.ne.jp
事務局　芳賀　陽子
電話　046・865・4307
Eメール　yk.haga@w3.dion.ne.jp
印刷所　㈲湘南グッド